若手コーナー

県立宮古病院より発信
(若き医師らへの温かいエール)

沖縄県立宮古病院 医療部長　本永　英治*
内科医師　耒田(らいた)　善彦

まだ自分の進路を決めかねている若い先生たちへ、離島中核病院と位置づけされている沖縄県立宮古病院で13年間勤務している先輩医師として、何か進路を決めていく上での参考になればと思い、老婆心に近いような気持ちで自分の気持ちをここに書かせて貰います。そして同時に当院で、いつも前向きに積極的に仕事をし、離島での生活を工夫しながら楽しんでいる一人の内科医師からのメッセージも紹介させて頂きます。

最初に当院で勤務している耒田善彦先生からのメッセージです。

こんにちは。現在、宮古島の県立病院で内科医として勤務させていただいています。医学部生の頃にはまさか自分が沖縄県で働くなんて考えてもいませんでしたし、宮古島に来ることも考えていませんでした。

何かの縁で沖縄にて初期研修医として来て、気づいてみれば6年目になっています。

初めて宮古島で医療にふれたのは、沖縄県立中部病院の後期研修医の時でした。1か月という短い期間でしたが、先輩医師にこないかと言われ、少し不安もありながらも勤務させてもらったのが最初です。当直で入院させた患者さんを疾患の種類にかかわらず自分で退院まで治療させていくという総合内科スタイルは、今まで専門科で細分化された病院を研修してきた自分には新鮮なものでした。当直では一次救急から三次救急を行い、また日頃の外来では自分の専門分野の外来を行い、救急・外来で診察して入院になった症例は受け持つというシンプルなシステムです。

基幹病院の為、多くの疾患の患者さんに触れることができ、その都度、知識を整理しアップデートできるので、現在まで2年間宮古島で過ごしています。離島の基幹病院の魅力はこれに尽きる気のではないでしょうか。病院には琉球大学、中頭病院、県立病院、その他の県外の研修医が来ています。モチベーションの高い若い先生が多く、彼らの良き医師になりたい、という姿勢は他の多くの医師に良い影響をもたらしており、彼らの日々の臨床経験から出る疑問から我々も勉強させられるところも多いです。

初期研修医の2年間は、その後の医師の思考回路の形成に大きくかかわっている時期ですので、彼ら自身も努力するのはもちろんですが、我々スタッフにも大きな重積が生じてきます。全国で医師不足の叫ばれている中、研修医に魅力ある病院を作り、地域医療の活性化をはかろうと努力されている病院スタッフ・宮古島地区医師会の取組みは、いずれ大きな成果となってくるでしょう。日々楽しくまた時には重症の症例で厳しい日々を過ごしながら充実した毎日を過ごしています。

こちらに来てからは、プライベートの時間も充実しています。休みの日は宮古島の海・自然を楽しんでいます。宮古島トライアスロンのスタート地点である前浜ビーチは東洋一のビーチと言われるほど美しいですし、来間島の満天の星は子供の頃みたプラネタリウムのように見え

ました。

夕方は、家の裏の海からシーカヤックで沖に出て伊良部島の夕日を楽しみ、休日は水上バイクでアイランドトリップに興じています。

最後に離島医療に関しては、みなさんいろいろ考えがあることと思います。私も決して、美徳化はするつもりもないですし、離島医療には様々な問題も抱えていることは事実です。しかし、多くの小さな診療所が存在するように、その地域に住民がいて社会生活が営まれている限り医療の需要と供給は存在し、沖縄県が多くの島で囲まれているという事実がある以上、離島医療は避けては通れないのではと思います。逆にこの特色は他の地域にはないものでもありますし、独自の医療ブランドとして確立していければ、今後、全国的に医師不足と言われている中、他の地域へのモデルとなりえるのではないかと考えています。

以上、耒田先生から、宮古病院での勤務状況や、病院を離れて暮らしの中で余暇を楽しむ様子などを紹介して貰いました。私自身も医師としての離島での勤務経験が大半を占めています。莫大な医学知識を修得していくために、また新しい医学技術を身につけ一人前の医師になるためには、私ら医師は多くを学んでいかねばなりません。この道がどれほど遠く困難であるかは、その前に立ってみると解ります。**身震いするほど果てのない途と険しい壁が自分自身の前に立ちはだかっているのです**。

有限の時間、有限の人生、家族のこと・・色々なことが頭に浮かびます。その中で、「俺のこれからの医師としての人生が、離島にいくことで回り道となり、現代医療に遅れてしまうのではないか・・大丈夫なんだろうか・・」・・そんなことを考えてしまうのも無理はないと思います。

でも、よく考えてみようではないでしょうか。**私らが受けてきた教育の本来の目的は何でしょうか？**

自分自身の力で学び、そして自らの頭で物事を考え、自立の精神を身につけ、自己の力によって自分自身の人生観、世界観を形成し打ち立てること・・・それを可能にし、それによって人間と人間の連帯社会を築きあげていくようにすること・・・それが教育の目的だと思っております。

これまで大きな病院で多くの先輩医師等の助言や自ら学んだことを元に、臨床現場では、診断・治療の意思決定がなされてきたと思います。これまで決して一人の力ではできていなかった意思決定は、本来は、自分自身の頭で、これまでの知識を自らの頭の中で分解し、現実と照らし合わせながら、再度ふるいにかけ構成そ

して論理化し、責任ある自己の判断がなされなければならないのです。また、そのように自らを鍛えていかないと、なかなか自立した医師にはなれないような気もしています。そのトレーニングをどこで行うのか・・・私は県立宮古病院のような離島の病院やさらには医師一人しかいない離島診療所などは、まさに最適だと考えております。最初は戸惑うかもしれませんが、だんだんと慣れていくに従い、これまでの経験と知識を分解し、再度、頭の中で論理化し再構築化していく作業を繰り返し行いながら、自らの力で物事を判断し決定できるようになっていくと思います。

さらには、人間社会のもうひとつの重要である医療の姿が、離島の病院にこそ、目にみえるように転がっているのです。少ない資源で、私ら医療従事者はお互いに助け合いながら、コミュニケートし、そして一方、本来の目的である、地域で暮らしていく住民たちの健康をよりよりものにしていく、という大きな社会性を持っているのです。忙しい環境にしては見失いがちになることです。

医療の現場では、医療従事者らひとりひとりが連帯・協力し、そして社会的弱者と呼ばれる健康を損なった人たちを、より良い人生が送れるようにと後押ししています。医療従事者らがこれまで学んできたことを実践できるのです。これこそが本来の医療従事者としての喜びなのです。共存し、相互扶助していく地域社会の実現への姿を、病院での救急室や外来・入院を通して、直に感じることが出来ると思います。地域に医療の原点はあるような気がします。そんな地域医療の原点を感じる閾値が下がっているところが、離島の病院ではないでしょうか・・・生活感に溢れているのです。

ぜひ、1ヵ月でも、半年でも、それから1年でも2年でも、さらには5年でも10年でも、離島医療を体験し、自分の医師としての人生設計に役立て欲しいと期待しています。1年や2年の遅れは、私はいつでも取り戻せるのではないかと思いますが・・・こればかりは、自分自身の考え方に負いますので、何ともいえません。とにかく、離島の病院へ行ってみよう・・・そんな積極的な行動から夢ある期待できる未来医療の姿が多く生まれると思います・・・未来医療はあなたたちの手に在るのです。

最後に、離島での勤務の最大の良さは出勤に時間がかからず、自己健康管理にはもってこいの場であり、さらに癒し系の南西諸島特有の自然が待ち構えていますので、人生を振り返り眺めるのにもってこいの場だと確信しています。

原稿募集！
「若手コーナー」（1,500字程度）の原稿を随時、募集いたします。開業顛末記、今後の進路を決める先生方へのアドバイス等についてご寄稿下さい。